

令和 3 年 1 月 1 4 日

1. 報告者

氏名（フリガナ）	宮本 匠（ミヤモト タクミ）
生年月日（年齢）	昭和 5 9 年 7 月 3 0 日（3 6 歳）
所属機関名	兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科

※年齢は令和 3 年 3 月 11 日現在

2. 研究内容

研究テーマ	「復興曲線」を用いた被災者の復興感についての研究
研究分野	復旧・復興／社会／心理／被災者支援／地域振興
研究概要（要約）	
被災者に災害から今までの心理的变化を表す曲線を描いてもらいながらインタビューを行う「復興曲線」を開発し、1995 年阪神・淡路大震災や 2004 年新潟県中越地震、2011 年東日本大震災の国内の被災地や、2004 年スマトラ沖地震津波、2008 年四川大地震などの海外の被災地で調査を実施してきた。これらのインタビュー結果から、被災者の心理的落ち込みが災害直後よりも少し後の方が激しいという「二番底」現象や、被災者の内発的な復興に資する外部支援者の受容的なかわりなどを明らかにしてきた。	
研究の背景	
災害研究においては、これまで国内外ともに、緊急時や短期間の復旧、あるいは防災が扱ったものが多く、長期的な復興過程を扱う研究が求められている。この復興過程については、体系的・実証的な「生活復興」に関する大規模定量調査が行われてきた。これに対して、本研究は被災者の復興過程を可視化する「復興曲線」を用いて、被災者の長期的な生活復興過程全般にわたる復興感を定性的に明らかにするものであり、これまでの定量的な研究成果と相互参照されることで、被災者の復興過程の動態を立体的に把握することが可能となる。	

具体的内容

本研究は、被災者に x-y 座標軸が描かれたシートを提示し、横軸を災害から現在までの時間、縦軸を心理的にポジティブあるいはネガティブな状況として、災害から現在までの気持ちの変化を表してもらった「復興曲線インタビュー」を用いて、どのような要件が被災者の心理的回復に寄与するのかを明らかにするものである。例えば、図1の曲線のように、復興プロセスの進展とともに、曲線を押し上げる要因が変化していく様子を把握することが出来る。これまで、1995年阪神・淡路大震災や2004年新潟県中越地震、2011年東日本大震災の国内にて、また2004年スマトラ沖地震津波、2008年四川大地震などの海外の被災地で調査を実施してきた。

これまでの研究から分かったことのひとつとして、図2が示すような「二番底」現象がある。これは、被災者の惨事ストレスは災害直後よりも少し時間がたった後の方が深刻であることを示している。

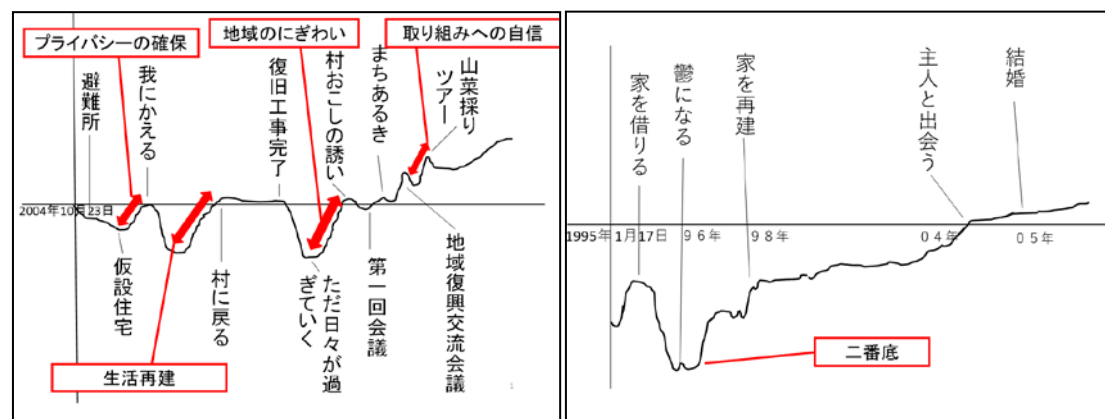


図1 中越地震の被災者が描いた復興曲線 図2 阪神大震災の被災者が描いた復興曲線

復興過程についての定量的な研究は実証的な確かさはあるものの、研究者があらかじめ何がしかの指標を設定する必要があるため復興の多様性を明らかにするには限界がある。それに対して、インタビュー等の定性的研究は復興の多様性を探索的に明らかにすることは可能となるが、被災者・被災地間を比較しながら普遍的知見を引き出していくのには限界がある。これに対し、本研究は、復興過程を「曲線」を用いて表すことで、復興に関わる要件を探索的に明らかにするとともに、被災者・被災地間での比較や、定量的な研究成果との相互参照を可能にしている。

東日本大震災の被災地で実施した「復興曲線インタビュー」からわかったことは、宮城県気仙沼市で実施された調査からは、復興支援において問題解決がはかられることが逆に被災者の力を奪うことがあること、被災者のエンパワメントには問題解決より先に被災者の主体性が回復されることが重要であること、そのためには被災者自身が自らの価値を肯定できるようなかわりが重要であることを指摘した（宮本，2015）。また、福島からの県外避難者に実施した「復興曲線インタビュー」では、そもそも曲線を描けるということと心理的回復には関係があることを示した（宮本，2017）。

期待される効果
復興過程を曲線によって表現することで、1) 長期的な災害復興過程において、どのような出来事がどの程度、被災者の心理の変化に影響を与えたのかを把握できること、2) 多様な出来事からなる復興過程をあえて一本の曲線で表現することで、被災者間での比較が容易になること、3) 曲線を総体として見た時にどのような要素が短期的な心理の影響を与え、どのような要素が長期的な心理の変化（あるいは維持）に影響を与えたのかを把握できること等のこれまでの研究手法にはない利点があり、定性的研究と定量的研究を組み合わせた復興研究を可能にすることが期待される。 また、本手法は研究者による活用だけでなく、阪神・淡路大震災から 15 年の節目に NHK が、震災 20 年に神戸新聞、朝日新聞が本手法を活用したほか、東日本大震災 5 年の節目に岩手日報が、9 年半の節目に NHK 盛岡局が被災者の復興過程を取り上げる際に本手法を採用するなど、それぞれの被災地の節目に報道機関によって被災者の復興過程をふりかえるツールとして採用されている。本手法は、被災者の多様な復興過程を広く社会に伝える媒体として機能しており、これらの調査結果から得られた知見が、例えば直後に注目されがちであった惨事ストレスのケアをより長期的な視点で見る必要があるなど、政策立案や被災者支援の現場に生かすことが可能になると期待される。

補足資料
宮本匠（2015）災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり—東日本大震災の復興曲線インタビューから—，質的心理学研究，14，6-18.（査読有り） 宮本匠（2017）県外避難者の復興曲線から考えること，災害復興研究，9，73-80.